



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	図書館ニュース vol.30, no.2
Author(s)	東京学芸大学附属図書館
Citation	
Issue Date	2001-10-00
URL	http://hdl.handle.net/2309/60009
Publisher	東京学芸大学附属図書館
Rights	

図書館ニュース

Vol.30, No.2 (2001.10)

本との出会い空間

山口 源治郎

出版業界の吐息

先日、出版業界誌の編集者と話す機会があった。話題は自然と現下の出版不況や読書の問題に及んだ。いまに始まったことではないのだが、とにかく本が売れないのである。‘かたい’本などは本当に売れないというのである。そうした出版危機を背景に、『人はなぜ、本を読まなくなったのか?』(室謙一・仲俣暁生、2000年)、『だれが「本」を殺すのか?』(佐野真一、2001年)などという、どぎついタイトルの本も出されている。

ところが何とも不思議なことに、新刊発行点数だけは近年急激に伸びている。1990年には38,680点だったものが、2000年には実に65,000点を超えた。売

れもしないのに、夥しいばかりの新刊書がなぜこうも発行されるのか。

かつては息長く読み継がれるいいものをつくるのが、出版社の安定経営に繋がった。だが今は、このいいものがさっぱり売れなくなっている。頼みの綱の図書館も資料費削減でなかなか買ってくれない。売れる見込みのない本を在庫として抱えていても不良債権化するのでは、裁断して紙屑にするか、こっそり古本マーケットに流すしかない。

他方、出版社を倒産させないためには、当座の食いつなぎの資金を稼ぐほかはない。そのためにはとにかく自転車操業的に新刊書を出していかざるをえないというのである。しかも一定数売れるためには、“うけ”を狙わなければならない。あわよくば一発当

目次

本との出会い空間(山口源治郎).....	1
教育系電子情報ナビゲーションシステムを導入.....	3
図書館への注文・学生への注文(関沢正躬).....	6
本との出会い:『気流の鳴る音』(浅野智彦).....	8
導入データベースガイド:「雑誌記事索引ファイル」、「BOOKPLUS」.....	9
お知らせコーナー 平成13年度基本的学術図書購入決定リスト.....	11
平成13年度附属図書館委員会名簿	
平成13年度後期図書館暦(10月~3月).....	12

ててみようかというギャンブラー的な邪念に取り付かれてしまう。いいものをつくるなどということは、遠い昔の話となる。

常識的には新刊発行点数が増えるということは、出版物が多種多様になることであり、望ましいことのように思える。しかしその裏の事情をみると、出版業界の吐息の数が多くなるほど、新刊点数が増えるというカラクリだったのかと思えてしまう。しかもきわもの的で似通ったものばかりという印象も拭えない。‘こころざし’の生業もなかなか厳しいようだ。

今どきの学生さんは本を読んでいるか

ところで本が売れないということは、本が読まれなくなったということでもある。‘学歴貴族の末裔’たちの間でも読書の凋落は著しい。愛読するのは少年漫画雑誌である。京大生の間では、本をよく読んだり、大学の勉強に熱心な学生は、民間企業で出世するタイプとは考えられていないという。(竹内洋「教養からの逃走」『中央公論』1999年9月号)。いわゆる教養主義的、権威主義的な読書が廃れることに未練はないが、読書そのものが廃れることは何となく寂しい思いがする。高校生の間でも本なんか全く読まない層はここ10年の間6割を超える状況だ。

ではわが東京学芸大学の学生さんの読書状況はどうなっているのだろうか。昨年6月に国立教育系大学附属図書館協議会によって興味深い調査が行われた。それによると、学芸大の学生が1ヶ月に読んだ本の冊数は、0冊(22.0%)、1冊(20.1%)、2～4冊(36.2%)、5冊以上(21.6%)となっている(『大学生の読書と電子メディア利用に関する調査研究』2000年10月)。

この数値をどう評価するかは分かれよう、0～1冊が44.2%もあるのは教育系大学の学生としては情けないと感じる人もいようし、世間一般から見ればよく読んでいる方だと安心する人もいよう。読んだ冊数が問題なのではなく、どんな本を読んでいるかが問題だという人もいよう。確かに「印象に残った本」には、乙武洋匡、村上春樹、大平光代、ダニエル・キースなどのベストセラーものがずらりと並んでいる。中学生高校生の読書傾向ともほとんど差はない。灰谷健次郎の作品がいくつかあがっている点

に教育系としての特徴が垣間見られる程度だ。

図書館は本との出会い空間になっているか

それでも私は、8割近くの学生がその多寡は別として本を読んでいることに望みをつないでいる。しかも「読む本を選ぶきっかけ」として、「授業での紹介・教員のすすめ」をあげたものが、37.5%も存在することも注目される。私たちはもっと本のおもしろさを学生に語る必要があるのだろう。

いまひとつの望みは、学生が本学の附属図書館をよく利用していることである。もちろん図書館に来るからといって本を読んでいるとは限らないが、週1回以上利用するものは65.5%もいる。逆にほとんど利用しないものは6.8%とわずかである。とすれば図書館が本との出会い空間になっているのか、一度問うてみる必要があるのではないか。

図書館では分類記号にしたがって実に行儀よく本が並べられている。求める資料もコンピューターをたたけばディスプレイ上に表示される。しかし何かおもしろくない。この点最近の書店は実におもしろい。例えばあるテーマの本を平台に集めて展示販売したり、棚づくりに随分工夫をこらしている。しかもなかなかの品揃えなのである。こんな本もあったのかと気づかせ、好奇心と購買意欲を刺激してくれる。

大学図書館にもそういうおもしろさが必要だと私は思う。教育双六などの貴重コレクションの展示も楽しいが、現代の教育問題や社会問題、学生の生活や生き方に関わる資料の展示があってもよい。教科書選択問題、児童虐待、引きこもり、自分探し、ダイエット、ボランティア、介護保険制度など、本学の教員のサポートも受けながら、図書館員自身が楽しみながら企画するのである。また教員はもちろん、図書館員や学生自身による手書きのコメントが添えられた推薦本を展示するコーナーなどがあってもよい。

「今どきの学生は……」と嘆く前に、「へえー、こんな本もあったんだ」と学生を振り向かせてみせる、そんな本との出会い空間を図書館につくってみるといのはどうだろうか。

(やまぐち・げんじろう 生涯教育研究室教授)

教育系電子情報ナビゲーションシステムを導入

附属図書館では、従来から電子図書館的機能の整備・充実をめざし、OPACのインターネットによる公開、各種オンラインデータベースの導入、貴重書の電子化などをすすめてきましたが、平成12年度補正予算により、「教育系電子情報ナビゲーションシステム」が導入され、図書館における電子的な情報サービスをさらに高度なレベルで推進していくこととなりました。「教育系電子情報ナビゲーションシステム」は、最新のマルチメディア技術を備え、高度に統合化された情報蓄積・提供システムの上で、本学の学生・教職員のみならず、全国の現職教員を含む教育関係者に対して、各種の教育系電子情報に対するゲートウェイ(入り口)の機能の提供を行います。

本システムによるサービス内容と機能

(1) インターネット上に散在している有用な教育関連Web情報をロボットにより自動的に収集し、全文検索可能なインデックスを生成することによって、教育関連Web情報に特化した質の高い検索を効率的に行えるサーチエンジンを提供する。

(2) 現在までに出版された初等・中等教育の教科書や本学刊行論文、教育実践情報などに対するメタデータ(書誌情報)を作成する。全文情報や画像情報などともリンクすることによって、各種のオリジナルデータベースを本学において形成し、発信する。

(3) 上記(1)、(2)により形成されたデータベースや本学図書館のOPAC、さらには雑誌記事索引やインターネット上で提供されている各種の有用な教育系データベースをワンストップで横断的に検索できる統合情報検索環境を提供する。

(4) デジタル化された音声動画像情報をデータベース化し、ネットワーク上に配信できる機能を整備する。



(5) 利用者向けのネットワーク端末(写真)や映像視聴用端末を充実させ、「教育系電子情報ナビゲーションシステム」によって提供されるサービスやその他のネットワーク情報を良好な環境で利用できるようにする。

これらのサービスや機能を有機的に連携することによって(次頁図1)、「教育系電子情報ナビゲーションシステム」は、教育情報に対するポータルサイトをめざします。皆さんがレポートや論文をまとめたり、教育実習の準備をするとき等に役立てることができるようのみでなく、卒業して教壇に立ってからも、日々の実践の中で生じるさまざまな問題に対処するための情報を効率的に入手できる頼りになるサイトにしていきたいと考えています。

「教育系電子情報ナビゲーションシステム」はまだ未完成であり、これから徐々にコンテンツを充実させていく予定ですが、ここではサービスを計画しているメニューの中から「統合情報検索環境」を取り上げ、その内容や利用法を簡単に紹介します。

統合情報検索環境

「統合情報検索環境」とは、従来それぞれのサイトに接続して個別に検索を行う必要のあった各種のオンラインデータベース等を、統合的・横断的に利用

できるようにするものです。複数のデータベースをひとつの画面から検索したり、同じ検索条件で複数のデータベースの一括検索を行うことができます。また、検索結果に対して本学での所蔵を確認する機能もあります。

検索先については、本学の学生・教職員や全国の教育関係者にとって有用であると考えられるもので、横断検索が技術的に可能なデータベースを中心に選んでいます。現在、本学のOPACを初めとして、Webcat(全国総合目録) 雑誌記事索引、ERIC(北米の教育文献情報)など12種類(学外向けは9種類)を選定し、図書や論文の情報のみでなく、インターネット上のWebサイトも検索の対象としています。

操作方法

メニューに接続すると次頁図2に示す画面が表示されます。画面は3つのフレームに分かれており、それぞれ、[ヘッダ情報]フレーム(画面上)[メニュー]フレーム(画面左)[操作]フレーム(画面右)となっています。[ヘッダ情報]フレームには検索方法の選択メニューやログアウトボタン等が表示され、統合情報検索環境に接続している間、常に表示されています。[メニュー]フレームでは、検索先の選択等を行います。[操作]フレームには、データベース

の検索画面や検索結果が表示されます。

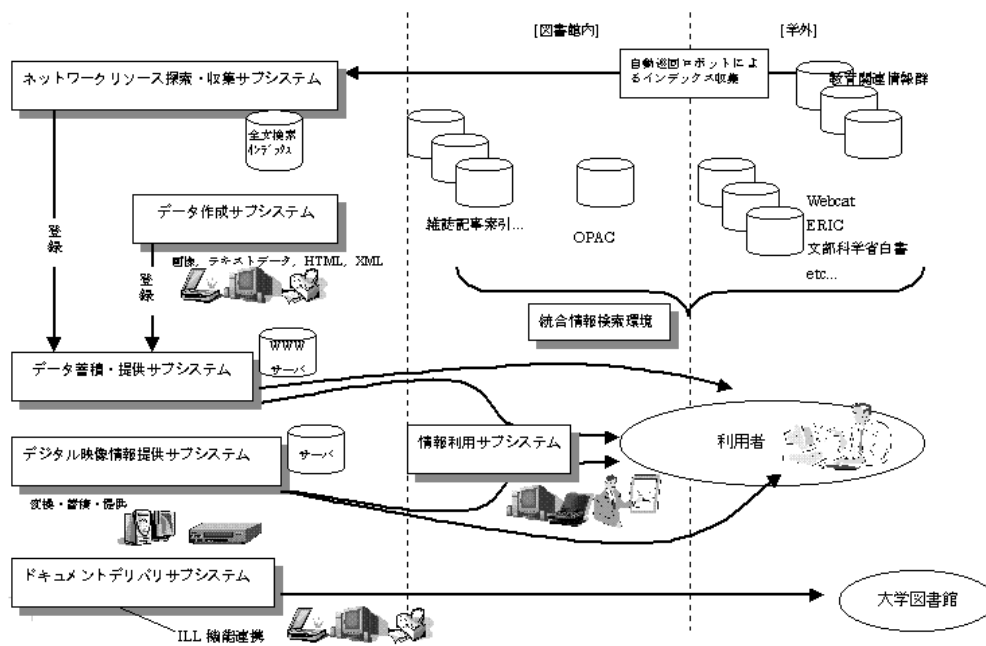
検索方法には「個別検索」「順次検索」「横断検索」の3種類があり、[ヘッダ情報]フレームの選択メニューで検索方法を選択します。

「個別検索」では、検索対象のデータベースを個々に検索します。[メニュー]フレームから検索先を選択すると、[操作]フレームに個々の検索先ごとの検索条件入力画面が表示されますので、条件を指定して「検索」をクリックすると、結果が表示されます。

「順次検索」では、同じ検索条件で複数の検索先を順次に検索します。まず、[メニュー]フレームで検索先をチェックし、[操作]フレームの検索条件入力画面に条件を指定して「検索」ボタンをクリックします。すると、[メニュー]フレームにチェックした検索先が表示され、[操作]フレームに検索結果が表示されます。この検索結果は[メニュー]フレームの一番上の検索先の検索結果です。[メニュー]フレームで別の検索先をクリックすると、検索条件を再入力することなしに、その検索先の検索結果を[操作]フレームに次々に表示させていくことができます。

「横断検索」では、同じ検索条件で複数の検索先を一括検索します。[メニュー]フレームで検索したい検索先をチェックし、[操作]フレームの検索条件入力画面に条件を指定して「検索」ボタンをクリック

図1 教育系電子情報ナビゲーションシステム概念図



します。検索が終了すると(検索先の状況によって、検索に時間がかかる場合があります)[メニュー]フレームにチェックした検索先とヒット件数が表示されます。次に、それぞれの検索先のヒット件数をクリックすると、[操作]メニューに検索結果を表示することができます。

本サービスにはこの他に、「本学所蔵確認」の機能があります。検索結果の詳細データが[操作]フレームに表示されたら、[ヘッダ情報]フレームの「本学所蔵確認」と表示されている右側の「実行」ボタンをクリックすると、表示されている図書等について、本学での所蔵情報を表示することができます。ただし、この機能は検索結果の詳細データにISBNやISSNが表示されている場合にのみ利用できます。

このように「統合情報検索環境」を利用することにより、従来個別に利用するしかなかった各種のオ

ンラインデータベースを、統合された環境で連携させながら活用していくことができるわけです。このサービスによって、皆さんの情報収集活動がさらに快適に効率的に行えるようになることを願っています。

「教育系電子情報ナビゲーションシステム」では、この他にも有用ないくつかのサービスを展開していく予定です。それらについても「図書館ニュース」やホームページ等で順次紹介していきたいと思えます。このシステムはまだまだ発展途上ですが、皆さんのご意見・ご感想等をいただき、便利で役に立つサービスに育てていきたいと思えますので、ご支援のほどお願いいたします。

(情報管理課目録情報係)

図2 統合情報検索画面



随 筆

図書館への注文・学生への注文

関 沢 正 躬

かつて1984年から86年までの2年間プラハに滞在し、この美しい街で幾何学の研究にたずさわる共同研究の友を得た。その2年間の滞在以来、ほぼ毎年、夏から秋への2か月あるいは秋の1か月をこの街プラハですごしている。この美しい街で行なう夏の共同研究はふたりの楽しみのひとつである。

共同研究で議論を効率的に進めるには、日ごろの情報の交換がだいじな役割を演じる。その主な手段は、ひとむかし前は手紙だったが、最近はもちろん電子メールである。電子メールは研究者の間の連絡用につくりだされた手段である。私はかなり早期からこの連絡方法をつかっている。研究のための連絡方法が電子メールになって以来連絡の仕方がいくらか変わった。手紙が主体であったころには、だいじな事柄を書き落とさぬようにいつも気をつけていて、月に2、3回手紙を交換していた。送った手紙が届くまでに1週間かかり、返事が戻るまでに1週間かかるから、けっきょく、月に2、3回手紙を書くことになる。電子メールによる情報の交換は、月に2、3回ではなくて、週に2、3回になっている。電子メールの場合にはよく準備して気をつけて書くという状態の対極にある。できるだけ誤解が起これぬように気を付けはするが、準備してから書くという習慣はなくなった。原則として、メッセージを読んだその場でただちに返事を書く。その場では返事を書けないときでも翌日には返事を書くが、それはたいがいの場合いそがしいときだから文章を準備してから書くというふうにはなっていない。

電子メールという媒体は、交換できる情報の量を(たとえば単語数でいって)飛躍的に増やすという利点をもっている。しかしこれは直接会って行なう会話に取って代わるということとはできない。情報を交換する媒体というものは、どれも創造の世界から生

まれた事柄を処理するには便利ではあるが、それ以上のものではない。だから、私はいつも夏の共同研究を楽しみにしている。

手紙の場合とくらべると、電子メールの場合には研究に直接に関連しない事柄に関する意見や感想を書く比率も増えている。学芸大学が「改組」とよんで大学の構造を変えようとしていたときには、会議を終えて研究室にもどったときに電子メールを送ることが多かった。そのたいがいの場合が会議の経過に怒りがついているというときであった。「かくかくしかじかの件に対する当局の判断はかくかくしかじかである。彼らの判断は合理的な判断であるとは思えない。」というたぐいのメッセージを送って、その件に対するプラハの友の感想を求めることが多かった。大学の会議は夜遅くに終わることが多かったし、東京とプラハの間の時差がうまく機能して、翌日の朝には返事を受け取ることができた。一晩が経過したその時にはこちらはいくらか冷静になっている。そういうときに読む返事は事態に対する対応の仕方を決める助けになった。そういうしだいだから、プラハは学芸大学の「改組」の経過を知っていた。学芸大学の当事者との私的な会話のうちでは「プラハの判断によれば」といってプラハの友のメッセージの内容を伝えたこともある。

人が情報を交換するときには、もちろん、共通の言語が要る。しかし、世の中は共通の言語があれば情報を交換できるというように単純にはできていない。情報の交換をうまく進めるには共通の感性が要る。たとえば、「かくかくしかじかの件に関して、迷惑をかけて申し訳ない。」というのは充分ではないが、無意味である。一方がまちがっていたときにはもちろん謝るが、それだけではなくて、どういう事柄をどういうふうにも誤解していたか説明して、どの

部分をどういうふうに変更するとか、撤回するとか、どういう事柄を追加するなどという正確な情報を相手側に送るべきである。そうしないときには、何をどう考えているのかさっぱりわからないといわれるのを覚悟すべきである。覚悟というものはどれもこれもしたくないものであるが、このての覚悟はこのほかしたくないものである。

私はいま旅先のプラハで、共通の感性といいながら、日本の学生、もっと特定すれば学芸大学の学生の感性に思いをはせている。相手が特定の誰かであろうと、不特定の誰であろうとも、私たちは相手の感性を相手の言葉や雰囲気、あるいは立ち居振舞いから感じることになる。人が人の中にいるときには存在の仕方に対する作法が要る。作法を心得ていなければ無作法であり、成熟が遅れていると判断される。プラハの街でみかける若い人と日本の学生はあまりにも違う。この街にも奇妙奇天烈な格好の若者はいくらでもいる。私はその奇妙奇天烈ぶりがおもしろくて、行き交う人びとを観察して楽しんでいる。流行というものがあってあの人もこの人もという現象にもであうが、そういうときでさえも一人ひとりの工夫の仕方がおもしろい。誰も彼も同じだというふうではない。なるほどそういう手があったかと思っていると、またほかの手が現われる。ところで、流行を追いかけている彼らの恰好は奇妙奇天烈ではあるが、彼らは無礼でもないし無作法でもない。少なくとも作法に関しては若者はすでに成熟しているようにみえる。たとえば電車やバスの中で席をゆずるべきときには彼らはただちにゆずっている。

ヨーロッパの報道機関が行なう日本の政治家への痛烈な批判が日本に伝わるのはまれだから、それは日本では知られにくいだが、こちらで聞いたり見たり読んだりする報道では、批判するときにはどの国のどの場合にも批判は一般に痛烈である。ヨーロッパの人びとは日本の若者のことも知っている。政治家に対するときとはちがって若者に対する批判には手心が加わる——などということはないだろう。

ある日の地下鉄に乗っていたとき、向かいの席に母親に連れられたふたりの子どもがいた。ひとりには3歳くらいで、もうひとは6歳くらいにみえた。しばらくして、小さい方が一言大きな声で叫んだとき、大きな方が一言叫んだ小さな子の口を大

急ぎでふさいだ。公共の場で大きな声をだしてはいけないということを幼稚園児がすでに知っていて、しかももっと小さな子には注意させなくてはいけないことを知っているということに私は驚いた。日本の場合とのちがいはあまりにも大きい。最近の日本では若者にかぎらずあらゆる人の音域が上がりはじめている。そればかりではなく、音量が上がっている。つまり、きいきい声でどなるようになった。だから公共の場に静けさがなくなっている。大学の構内では音量を落として話をするのが一般的な傾向であるはずであるが、日本の大学の構内では大部分の学生が大きな声でどなっているし、建物の中ばかりでなく、教室で叫んでいる学生がいくらでも居る。だれがみてもそれは無作法である。彼らは基本的な作法を身につけていないのであり、彼らの行動は成熟の遅れを象徴している。

学生の成熟の遅れは図書館にも及んでいると聞いて私はあきれはてている。館内で走るとはとんでもないことである。図書館は食堂ではないし、閲覧室は談話室ではない。公共の場ではしてはいけないことがあるというだれもが知っていることを日本の学生は身につけるべきであろう。上に述べたようにプラハではそういうことは幼稚園の子どもでも知っている。

日本の場合には、無礼な学生や無作法な学生の行動をただ単になげくだけであり、そういう学生を締め出す積極的な手を打たない。それが無礼な学生や無作法な学生に対する日本の社会のかかえている問題である。「良識に期待する」といい続けているこの何年間に事態がますます悪くなっているという事実を認識すべきである。学生を良識の範囲におさめるには積極的な手を打たなくてはならない。図書館が強権を発動しなくては図書館で学び研究する環境を用意できないときには、図書館は強権を発動すべきである。学ぶ環境と研究する環境を整備するのは図書館の基本的な役割である。その役割をはたすには具体的な行動が要る。

(せきざわ・まさみ 数学研究室教授)

本との出会い

『気流の鳴る音』

浅野 智彦

私が社会学を専門に勉強してみたいと思ったのは、大学2年生の時に真木悠介(社会学者見田宗介のペンネーム)の一連の著作を読んでからのことでした。とりわけ強い印象を受けたのが『気流の鳴る音』(現在、筑摩文庫に入っています)という作品で、これを読んだ後単なる知的好奇心以上の何かでもって社会学に引き寄せられていくことになりました(そしてしばらくしてからこの本が社会学の中ではずいぶん異端に属することに気づくのですが)。

この本はカルロス・カスタネダという人類学者の(これまた人類学では異端の書とされる)何冊かの著作をもとに、人間と世界との関わりを比較社会的に描き出したものです。カスタネダの本は、彼自身がヤキ・インディオのドン・ファン・マテオスという呪術師に弟子入りし、経験したことを記録したのですが、そこから真木は、<自我の成り立ち>、<現実の構成>、<共同性のあり方>、<自然との関わり>、<生と死>、<資本主義的近代の成り立ち>、<身体と言語>等々人間と社会を考える上で最も基礎的ないくつかの問題に一貫した明快な見取り図を与えています。

この明晰な書のひとつの軸となるのが、トンネルとナワールという概念です。これはドン・ファンが用いる言葉なのですが、私たちの言い方にあえて直すとすると、ナワールは他者や自然や宇宙への本源的なつながりを指し、トンネルはそのようなつながりの中に秩序を持ち込む働き、端的に言えば言語を用いた相互行為の作用を指すものです。私たちがなじんでいるこの世界、この現実、生まれてこのかた私たちが身につけてきた(身につけてきたこと自体を忘れてしまうくらいに深く身につけてきた)トンネルを用いて構成されたものなのだとドン・ファンは語ります。

この本を手にした当時の私は、とりたてて具体的な理由はないにもかかわらず、何か言いようのない居心地の悪さに悩まされていました。どう説明していいのかわからないのですが、例えば自分が世界からずれて

しまっているような違和感、あるいは自分が自分であることがどうしてもしっくりこない違和感のようなものです。この本にひかれた一つの理由は、「自分」も「世界」も言語をつかって他者たちとコミュニケーションする中で構成されるものであって、絶対的なものでも唯一のものでもないという見方がとても気分を楽にしてくれるものであったことだと思います。現在社会学で流行中の「社会構成主義(構築主義)」がそうであるように、自明で強固なものにみえた前提を相対化することがもたらした解放感、と言ってもよいかもかもしれません。

しかし相対化するということは同時に自分自身が立つ足場を失うということでもあります。相対化が、より多くを見下ろす高みへの上昇だとすれば、それはどこに着地するのかという問題にいつつきあたるでしょう。この本のもう一つの魅力は、まさにこの着地を構想するための土台に光を当てている点にあると思います。すなわち、先にあげたナワールという概念はこの着地の思想をインディオのやり方で表現したもののなのです。ドン・ファンのレッスンはトンネル(自明な現実)を相対化し、人をナワールへ向けて連れ出すのですが、さらにナワールの力を手に入れた後、まさにその力を通してトンネルへと人を連れ戻すものでもあります。上昇と下降、その運動の後で再び降り立ったこの世界は単に自明な(むやみに信じ込まれた)ものでも、単に相対化された(「単に・・・にすぎない」)ものでもなく、ドン・ファンらの言葉を使えば「心のある道」を歩く過程となるでしょう。

こうしてみるとずいぶん抽象的な(あるいは神秘的な)話に見えるかもしれませんが、これらのレッスンはすべて身体のあり方を問いなおすごく具体的なものでもあります。世界とのかわり合い、他者とのかわり合いに関心のある(違和感をお持ちの)方に一読をお勧めしたいと思います。

(あさの・ともひこ 社会学研究室助教授)

導入データベースガイド

雑誌記事索引ファイル

- 学術調査・研究に定番の記事索引 -

「雑誌記事索引ファイル」は日本国内で刊行される学術雑誌、大学紀要、学会誌、専門誌の記事・論文の最大のデータベースで、全分野をカバーしています。

1975年より現在までの390万件にのぼる論文・記事情報が集積されています。

2週間ごとに最新情報が追加・更新され、毎年約17万件程度、増加しています。

学内限定（IPアドレス認証）のためアクセスは小金井キャンパス内に限られます。

同時アクセス数に制限がありますので検索が終了し次第、直ちに"LOGOUT"をクリックしてください。

検索した論文・記事の掲載雑誌はOPACで本学の所蔵を確認してください。

本学で所蔵していない場合は、Webcat(全国大学等の総合目録データベース)などで所蔵が調べられます。なお、国立国会図書館には、雑誌記事索引で検索できる雑誌が全て所蔵されています。

1975年以前の記事は図書館2階に置いてある冊子体で調査します。

自分が今どこにいるのか一目でわかります

検索方法を確認できます

< 検索の流れ >

ログイン

図書館トップページの「導入DB」にあるリストから選択

検索画面

検索対象分野を限定

刊行年月からの絞込検索

キーワードからの検索（任意一致検索）

著者名からの検索（前方一致検索）

雑誌名からの検索（前方一致検索）

出版社名からの検索（前方一致検索）

ISSNからの検索

ISSNは雑誌、新聞、年報などの、いわゆる逐次刊行物につけられた国際的な番号です。

検索項目ボックス キーワード、著者名、雑誌名、出版社名の検索項目をプルダウンメニューで選択

論理演算ボックス 「必ず含む」「いずれかを含む」「含まない」をプルダウンメニューで選択

再検索画面

1画面あたりの出力件数と出力順序を選択

一覧画面

チェックしたものだけを詳細表示します

詳細画面（別ブラウザで開きます）

ログアウト

検索結果 #0001~40007 (7件中)

全て表示 チェックしたものを表示 オールクリア

1	厚生労働省が育てた「熟女」刊行11回目に	産科雑誌 (ISSN)
2	昭和64年 松下経産一親生 国会議員の人生	産科雑誌 (大正)
3	第42回建築研究フォーラム全国会議「ネットワーク社会のシステムと人間」(後編)	改定版 (建築研)
4	第三部会 自治的福祉社会の創造第40回会議	改定版 (建築研)
5	第42部会11軍中と労働運動の15回第42回誌	改定版 (建築研)

1	雑誌	第42回建築研究フォーラム全国会議「ネットワーク社会のシステムと人間」(後編)
	改定版	改定版 (建築研究フォーラム) 499 2001.4 p22~43
	備考	NDL請求記号Z5-158【日経建研No.28124057】

BOOKPLUS

- 図書の内容情報のデータベース -

「BOOKPLUS」は昭和元年（1926年）より現在までに国内で出版された168万件の本の情報が集められています。

国内最大の書籍情報であり、毎週、新刊情報が追加・更新され、毎年5万冊ほど増加しています。

1986年以降の本には、内容・目次情報、小説のあらすじまでも収録しています。

学内限定（IPアドレス認証）のためアクセスは小金井キャンパス内に限られます。

同時アクセス数に制限がありますので検索が終了し次第、直ちに"LOGOUT"をクリックしてください。

検索した図書はOPACで本学の所在を確認してください。

本学で所蔵していない場合は、Webcat（全国大学等の総合目録データベース）などで所蔵を調べることができます。

< 検索の流れ >

ログイン

図書館トップページの「導入DB」にあるリストから選択

検索画面（標準と詳細があります）

刊行年月からの絞込検索

キーワードからの検索（任意一致検索）

著者名からの検索（前方一致検索）

書名からの検索（前方一致検索）

出版社名からの検索（前方一致検索）

ISBNからの検索

ISBNは図書の流通の合理化を図るためにつけられた国際的な番号システムです。

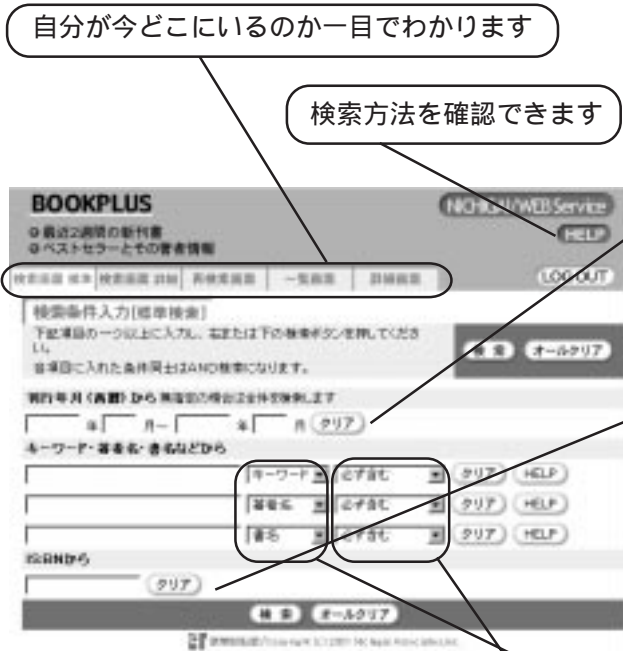
（詳細検索には次の項目が加わります）

NDC（日本十進分類法）による検索

原著者名（任意一致検索）

原書名/短編小説のタイトル（任意一致検索）

分類・形式 1986年以降の図書のみ対象



検索結果 1001~4011 (17 冊中)		D101010101010101010	
<input type="button" value="全て表示"/> <input checked="" type="button" value="チェックしたものを表示"/> <input type="button" value="オールクリア"/>			
1	『ゴロ野味人名事典 2001』西岡治編著		日外アソシエー
2	『スカウト』津藤正治著		講談社 2001.5.
3	『アースから探るゴロ野味スーパースターの物語』岩崎実編著		宝島社 2001.5.
4	『高級製菓師の自伝』西本繁著		小学館 2001.5.
5	『山村正徳のラジオ・テレビ』尾崎義之著		講談社 2001.5.

検索項目ボックス キーワード、著者名、書名、出版社名の検索項目をプルダウンメニューで選択

論理演算ボックス 「必ず含む」「いずれかを含む」「含まない」をプルダウンメニューで選択

再検索画面

1画面あたりの出力件数と出力順序を選択

一覧画面

チェックしたものを詳細表示します

詳細画面（別ブラウザで開きます）

ログアウト

1	書籍 『ゴロ野味人名事典 2001』西岡治編著	
	日外アソシエーツ, 2001.5.28(印刷)	
	651p 21cmx26cm 42,800円(税別)	
内 容	日本ゴロ野味見聞から現在まで、選手・監督3014人の最新データまで収録。2001年3月開催時の在野選手も完全収録の豪華・監修名作。	
備 考	ISBN4-8789-1655-5【日本製本No.80119598】	

お知らせコーナー

平成 13 年度基本的学術図書購入決定リスト

平成 13 年度に購入する基本的学術図書が決定しましたのでお知らせします。

基本的学術図書は、本学の教育・研究上基本的に必要な資料として附属図書館委員会によって選定されるもので、今年度は次の図書等を購入する予定です。順次図書館に収蔵されますので、ご活用ください。

1. システムソフト電子辞典（広辞苑・リーダーズ英和辞典・現代用語の基礎知識ほか）
2. 日本現代教育基本文献叢書 教育基本法制コンメンタールⅠ・Ⅱ 全 20 巻 別冊解説付
3. Methods in Enzymology. Vols.301-340
4. Nuclear Weapons, Arms Control, and the Threat of Thermonuclear War. Special Studies,1969-1995.(7)(8)
(マイクロフィッシュ)
5. 芸術療法学会誌 1-23 号
6. L'Homme, revue francaise d'anthropologie. vols.1-23
7. 山内清男 先史考古学論文集 1・2 付日本先史土器図譜，日本先史縄文（揃 4 冊）
8. History of Education 15th-20th Century Unit2 Fiche 1-1250(マイクロフィッシュ)
9. Journal of Cognitive Neuroscience vols.1-12(1989-2000)
10. Le Monde sur le CD-ROM Disque Archives 1-6(1987-2000)
11. Niels Bohr collected works in 10 volumes.
12. 生物学関連 Annual Reviews, 1998-2000 全 15 冊セット
13. 書跡名品叢刊 合訂版 全 28 巻
14. 臨床精神医学講座 全 24 巻及び別巻 1・2 巻
15. BBC The Human Body（未知なる生命・ヒト/日本語版）ビデオテープ全 7 巻
16. バルトリド著作集 9 巻 10 冊（Bartol'd-Sochinenija）
17. Eighteenth-Century Fiction(CD-ROM:Windows 版）
18. Artificial Intelligence(2000) in 4 vols

平成 13 年度附属図書館委員会名簿

所 属	学 科 名(研 究 室)	職 名	氏 名	任 期
図書館	地域研究学科（地域）	館 長	鷲 山 恭 彦	H13.4.1～15.3.31
第一部	社会科学学科（社会学）	助教授	浅 野 智 彦	12.4.1～14.3.31
	人文科学学科（歴史学）	講 師	及 川 英二郎	13.4.1～15.3.31
第二部	教育学科（教育学）	教 授	江 川 瑛 成	12.4.1～14.3.31
	心理学科（教育心理学）	助教授	成 田 健 一	13.4.1～15.3.31
第三部	生物学科（生物学）	講 師	中 西 史	12.4.1～14.3.31
	地学科（地学）	教 授	本 間 久 英	13.4.1～15.3.31
第四部	書道学科（書道）	講 師	加 藤 泰 弘	12.4.1～14.3.31
	音楽学科（音楽）	講 師	遠 藤 徹	13.4.1～15.3.31
図書館学関係	教育学科（生涯教育）	教 授	山 口 源治郎	12.4.1～14.3.31

平成13年度後期図書館暦(10月~3月)

日	10月	11月	12月	1月	2月	3月	日						
1	月	木	土	火	元日：年始休館	金	1						
2	火	金	日	水	年始休館	土	2						
3	水	土	文化の日	木	年始休館	日	3						
4	木	日	火	金	休館	月	4						
5	金	月	水	土	休館	火	5						
6	土	火	木	日	休館	水	6						
7	日	水	金	月	授業再開・延長再開	木	7						
8	月	木	土	火		金	後期授業終了	金	教育実習終了・延長終了	8			
9	火	金	日	水		土		土	休館	9			
10	水	土	月	木		日		日	休館	10			
11	木	日	火	金		月	建国記念の日	月	短縮開館：13:00まで	11			
12	金	教育実習終了	月	水		土		火	教育実習開始	火	休館：東京学芸大学入学試験(後期)	12	
13	土	臨時休館	火	木		日		水		水		13	
14	日	水	金	月	成人の日	木		木		木		14	
15	月	後期授業開始・文献の探し方オリエンテーション	木	土	火		金		金			15	
16	火	金	日	水		土		土	休館	土	休館	16	
17	水	土	月	木		日		日	休館	日	休館	17	
18	木	文献の探し方オリエンテーション	日	火		金	休館：センター試験準備	月		月		18	
19	金	月	水	休館：館内整理日	土	休館：大学入試センター試験	火		火		火	19	
20	土	火	木		日		水		水		水	20	
21	日	水	金	休館前授業終了・延長終了	月		木		木		木	休館：春分の日	21
22	月	文献の探し方オリエンテーション	木	土	休館	火		金	短縮開館：13:00まで	金		22	
23	火	金	勤労感謝の日	日	休館：天皇誕生日	水		土		土	休館	23	
24	水	土	月	休館：振替休日	木		日	休館：東京学芸大学入学試験(前期)	日	日	休館	24	
25	木	文献の探し方オリエンテーション	日	火		金		月		月		25	
26	金	月	水	休館	土		火		火		火	26	
27	土	火	木	休館	日		水	休館：館内整理日	水	水	休館：館内整理日	27	
28	日	水	休館：館内整理日	金	休館	月		木		木		28	
29	月	木	土	年末休館	火					金		29	
30	火	金	日	年末休館	水	休館：館内整理日				土	休館	30	
31	水	休館：館内整理日	月	年末休館	木					日	休館	31	

* 臨時休館日については、その都度掲示しますので、ご注意ください。

授業期 平日(月~金) 開館時間 9:00~22:00
土・日・休日 開館時間10:30~16:30

授業期 平日(月~金) 開館時間 9:00~17:00

編集発行 東京学芸大学附属図書館

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1
電話 042-329-7223 FAX 042-329-7226
URL <http://library.u-gakugei.ac.jp/>